

折紙探偵団新聞

R.ラング
特集号
第14号

120円

切り込み

連載好評

おりがみ庵

とりぐと
岡村昌夫

第2回 折り紙と

ペーパーフォールディング

アメリカではオリガミの起源は中国にあると誰でも思っているそうである。カナダのトシ青柳氏によると少なくともカナダでは、それは常識にはなっていないとのことであるがピーター・エンゲル氏のFOLDING the UNIVERSEという本に“Paperfolding originated in China around the first or second century A.D. and reached Japan by the sixth century.”などとはっきり中国で1～2世紀ごろに出来て6世紀に日本に来たと書いてあって、それが全く彼の“創作”とは思えないのである。発明当時の紙は布くずを固めたようなものだったそうで、とても折れるしろものとは考えられないから、1～2世紀というのは眉つばとしても、“ペーパーある所ペーパーフォールディングあり”という発想が、アメリカあたりで大きな説得力を持つことはじゅうぶん有り得ることであろう。ただここでいう“ペーパーフォールディング”をそのまま“折紙”と訳すと問題が生じるのである。

エンゲル氏は同書で、“折紙”という漢字について、例えば“折”の左半分は“hand”の象形であるなどと詳しく解説しているが、その文字が中国では“おりがみ”の意味として通用せず、また日本でもその意味で使われるようになったのが近代であるということはことを知らないらしく、またオリという日本語は“to fold”、ガミは“paper”の意味だと書いているが、(同じことを書いている本は他にもあるが)“Paperfolding”と“折紙”の概念が違っていることには気付いていないようだ。

先日銀座で行われた布施知子さんの作品展は“ペーパーフォールディング”の語を使っておられたが、なるほど通りすがりの人々の目にその作品が入っても恐らく“折紙”とは思われないだろうと感じられたものだ。笠原邦彦氏がビバおりがみシリーズの一冊として出された近著“おりがみ遊面体”の第1章は「折り紙とは何でしょう」から始まり、“折り紙”の定義付けに触れて、その概念を広げようという趣旨の「ささやかな提案」をされているし“純粹折り紙”という語を、[普通の折紙]の意味に(内山興正氏とは違って)用いているところがある。これらは国際化してきた“オリガミ”が従来の日本の“折紙”の概念では覆いきれなくなって来ていることを意味していよう。これを要するに、これからの“オリガミ”がどうなるかは別にして、その歴史を考える場合には“Paperfoldingの起源”と“折紙の起源”とを混同してはいけないのである。

前回にも書いたが、古代の中国にPaperfoldingがあったことを示す資料として、妻が落盤にするために紙を折って筋をつけたという内容の唐詩があるという。(ニューヨーク在住の篠塚女史から聞いたことだが、詳しい出典はわからない。)多分、杜甫の『江村』という詩を指すのだろうと思うが、(そしてその詩には「老妻畫紙～」とあって、筋をつけたのではなく線を描いたと解すべきであるのだが、)それはともかく、“Paperfolding”にはただ紙を折っただけ、筋をつけただけのものも含

まれていることがわかるのである。そうだとすれば、当然のこととして“Wherever there is paper there is paperfolding”であるが、しかし“紙あるところに折紙あり”となると我々の常識では首をかしげざるを得なくなる。明治以後の“折紙”という語は、一般にいわゆる遊戯折紙を指すことが多いからである。いわゆる儀礼折紙を含めたとしてもただ折っただけということではない。もしも幼児が四角の紙を三角に折って“山だよ”と言ったとしたら、それは“折紙”である。この場合、紙で造形するという意識を問題にすれば、ただ折っただけの紙とは言えない。具象的に何かに見立てるという行為によって、従来のいわゆる“折紙”は“折紙”たり得てきた。遊戯折紙よりは儀礼折紙の方が自然発生的に早く成立しものであろう。しかしそれでも何らかの意味を“折る”という行為に込めたわけで、そのことに人類が気付くまでにどのくらいの時間がかかったのだろうか。しかし少なくともその意味を知ってから、かなり短時間に技術的發展をとげたものだろう。もしそれに類した技術が6世紀に仏教とともに日本に伝わってきたとするなら、他の種々の技術と異なって随分発達テンポが遅いことになる。4～500年後に書かれた写実的な風俗小説である『源氏物語』などに、造形行為としてはもちろん、ただ“紙を折る”という行為すら(“包む”を除いて)記録されていないことをどう説明したらよいのだろうか。

さて、内外の種々の折紙書に「遊戯折紙は平安時代に始まった」ということが書かれている。中には蛙の折紙があったなどとするものさえある。その非なることを次回に述べてみたい。

実用折紙設計法

最終回

目黒俊幸

最初に何を折るか 決める

折り紙設計を用いて折りたいものの展開図を設計するにはどの様にすればよいかを考えてみます。

まず最初に何を折るかを決めます。いままで折られていない対象にも積極的に挑戦しましょう。また、すでに折られてしまった対象でも、更に突っ込んだ表現や折り方を目指すようにしましょう。

さて、目的が決まれば次にその形を単純化して捉えます。例えば、動物を設計したいときは図1のように考えてみましょう。

次に折り紙上にどの様に折り角を配置すべきかを図1を参考にして決めましょう。(図2)この折り角の配置は、折り紙の最も基本的な土台となるもので、以後の設計の方向を決定します。

ちょっと話題は飛びますが、「折り角の配置が折り紙の土台」という観点にたつと折り紙分類や折り紙解析においても折り角の配置が最も重要な概念になってきます。しかし、この概念はいままで軽視されてきました。今後、折り角の配置を中心とした折り紙論の発展が待たれます。

さて、話を元に戻しましょう。折り角の配置がすんだら次にその配置に従って折り紙分子を組み込み分子図を作ります。例えば、図2に対しては図3の様な組み込みが考えられます。この組み込みは一通りとは限りません。各分子の性質をよく考えて最もよいと思われる分子図を選択しましょう。

分子図が求まればその分子の内部の折り線を付け足せば展開図ができあがります。ここで用いた分子がすべて一値分子ならば、得られた展開図は、ほとんど無条件に折りたたみ

可能になっているということは、本連載で今までさんざん強調してきたことなのですでおわかりのことと思います。

あとはこの展開図を実際に折ってみると、折ろうとした目的物に必要な折り角は得られるはずです。ここからは、目的物に近づくように各折り角に表情をつけて作品を仕上げましょう。もし、うまく目的物が得られなかったら、もう一度展開図等をよくみて設計の手直しをしましょう。

以上の大まかな手順に従って皆さんも何か折り紙設計をしてみてください。

より多くの展開図 を見ており角の配置を見る

折り紙設計を上達するには多くのよい作品(設計で作られたものでなくてもいい)の展開図を見て、折り角の配置はどうなっているか、どの様な分子が使用されているかについて注意してみることです。その意味で「ビバおりがみ」は是非、目を通されるようにお奨めします。

今回で、実用折り紙設計法は連載形式では終わりにしたいと思います。今後は、機会のあるごとに、今までの話の応用発展を皆さんに読んでいただきたいと思います。私としては、本連載を通じて内山興正氏の折り紙に対する哲学(展開図による分類の導入)、伏見夫妻の折り紙幾何学、前川淳氏の展開図上の最小単位、第2次三角形の応用技法を折り紙分子を用いて統一的に理解発展させ、折り紙設計やその他の分野に応用してきたつもりです。

私の文才の無さからわかりにくい文章もあったかと思いますが、本当

頭

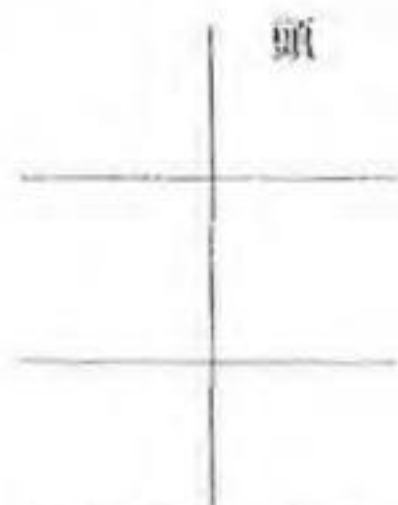


図1 動物のイメージ



図2 折り角の頂点となる場所を、黒点で示す

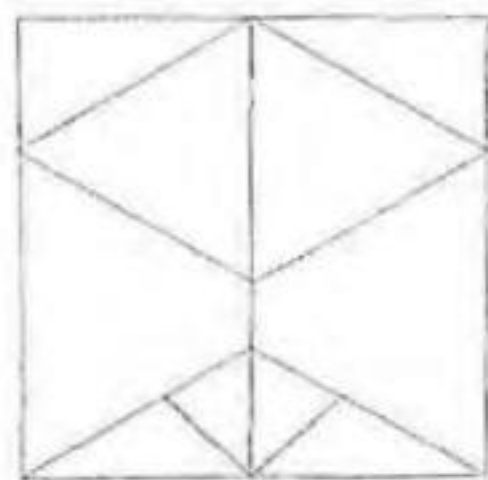
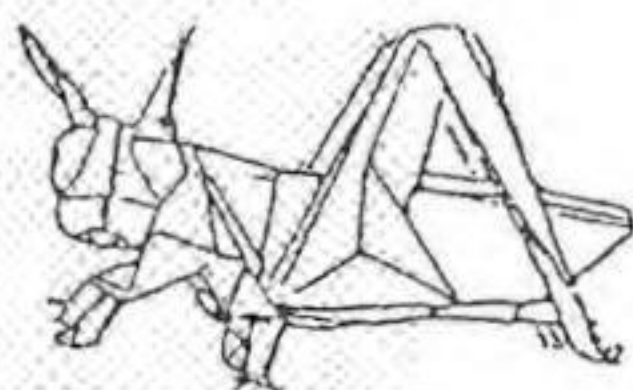
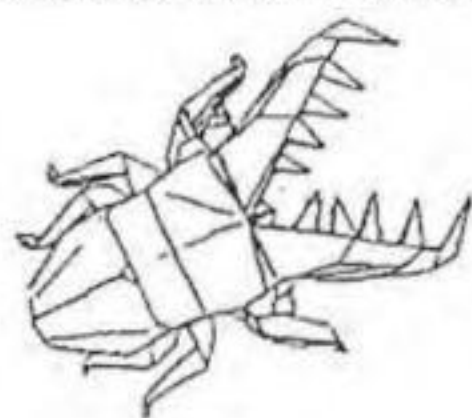


図3 図2をもとにした分子図

は折り紙設計も折り紙分子もわかりやすく楽しいものです。多くの読者の方が折り紙設計に挑戦して下さることを願います。

編集部から・・・

今回で、目黒氏の「実用折り紙設計法」はとりあえず最終回となります。長期連載ご苦労さまでした。目黒氏は本文の中にあつた設計手順である、対象の単純化→折り紙上への折り角配置→分子の埋め込み、という作業の各段階を合理的に結び付ける理論についても研究を進めています。今後の発表に期待したいと思います。



ロバート・ラング氏来日記念特集

うえるかむ・つう・じばんぐ・どくとる・あーる・える

ロバート・ラング氏作品に思う

川畑文昭

＜高度な設計と造型の融合＞

私は（本業の方ですが・・・）自動車の開発に携わっており、その仕事柄、時々折り紙を自動車に例えて考えることがあります。といっても折り紙の自動車を造るという事ではなく、その開発プロセスに例えての話です。

今回、それについて常々考えていることを、ロバート・ラング氏の作品に触れたのをよい機会として以下に述べて見たいと思います。

自動車の開発においてはいくつものステップがあり、大きく分けると、構想企画→設計→試作評価→生産技術→生産販売

という具合に分けられるかと思いますが（これは自動車に限らずどのような工業製品でも大体は同じことがいえると思います）。

なぜ折り紙のような芸術性の高いものを工業製品と一緒に考えられるんだと思われる方もおられるかとは思いますが、私はそのプロセスは折り紙にとっても大変重要な意味を持っていると考えております。

折り紙にあてはめれば、要は、

＜構想企画＞

どんな目的で何を造ろうかというテーマ選定

＜設計＞

前川理論、目黒理論に見られるような設計

＜試作＞

実際の創作過程、トライアンドエラーによる創作工程

＜生産技術＞

折り工程、折り手順を考える、整理する、折図作成

＜生産販売＞

出版、展示など

というように対応できるのではないのでしょうか。

これらのどれもが大変重要なのは明白で、特に折り紙の世界では、構想企画、設計がまだまだ不十分であり、あまりにも試作と生産技術の混在したトライアンドエラーに重点がおかれすぎているのではないかと感じてなりません。

ラング氏のこと

青柳俊明

ロバート・ラング氏は、現在アメリカの折紙デザイナーの中でも最もホットな存在のひとりであると言えます。

不切一枚折りにとことんこだわり、これでもかこれでもかとディテールを積み上げていくデザインには、突き詰めた執念さえ感じさせ、独特の魅力があります。

ラング作品は、折りやすくするために簡略化するといった配慮よりも以前に、創造力と彼自身の折りの実力とにまかせ、どこまでも際限もなく展開してしまうかの感があります。（最近、かなり歩み寄りを感じるのですが）

確実に設計され、綿密に付けられた折り線に導かれて、紙がうねるかのごとくに動いて破天荒な形に落ち着くとき、ばたんばたんとかく折り展開する時、機械的に見えた多くの工程の果てにエレガントでかつ迫力ある造形を手にした時、私は「ラングらしさ」に感じ入ります。

彼の創作活動は、今、上り坂一方の感がありますが、デザイナーとしてのみならず、折紙活動家としてのラング氏も忘れることはできません。

カリフォルニア州のウェストコースト・オリガミ・ギルドの代表をつとめ、どんなに仕事で多忙を極めても、会合への出席を欠かさないと聞いています。

また、英国折紙協会誌には、1985年以来エッセイを連載、ニューヨークのザ・フレンズの機関紙には、

私は、ロバート・ラング氏のその企画力、折図、完成作品、を見て、これこそ構想から生産までのすべての面で高度にバランスのとれた折り紙であるとの感銘をうけました。折り紙到達すべき世界の一つを見ることが出来た様な気がします。幸にも今年ロバート・ラング氏の来日が実現するかもしれません。その時には是非お会いし折り紙について語り合うことが出来ればどんなに素晴らしい事でしょう。

折り図記号の研究の全7回に及ぶ連載を執筆するなど、書き手・論客としても活躍しています。折紙図書出版へのコンピューターの導入実践の分野でも先駆的な成果をあげ、モンドロール氏の懐刀的な存在でした。

レーザー光線を扱う物理学博士として研究所にお勤めのラング氏の、科学者としての客観的な視点が、こうした活動の背景にあります。

沈着冷静、理知的でクールなラング氏ですが、まわりも驚くほどに今、彼をエキサイトさせているのが、日本の「折紙探偵団」。

お送りした折り図は100%確実に折り、あるときは熱っぽく「ニシカーフの虎は、史上最高のオリガミ・タイガーだ」、またあるときは「カーフハータのトウジャンゴサウルスの、あのスパイクが、スパイクが……」と、めろめろの反応が返ってきます。

日本折紙協会の招聘によるこの夏の初来日では、ラング氏と探偵団の皆さんとの第三種接近遭遇から、相乗的な創作エネルギーが生まれる事でしょう。どんなに美しい火花が散る事か、胸躍らせるものがあります。ただし、2週間弱と滞在期間が長くないのが心配で、「カミカゼ・ツアーになりますよ」と言いますと、「生きては帰りたいけど」とは、最近のラング・ジョークでした。

神風は 生きて帰れば 脱走兵
(世間亭)

料理長のお褒め料理

今日のメニュー

「十七星てんとう虫」

Spotted Ladybug

ロバート・ラング 作

by Robert J. Lang

日本語訳：青柳俊明

Translated

by toshiaki Aoyagi

料理長（代理）御挨拶

青柳俊明

昨年の夏、NOAの雑誌「おりがみ」への「ベイビー」の掲載のお手伝いをした折り、ラング氏から、お礼にと、模様折りのある甲虫を送っていただきました。

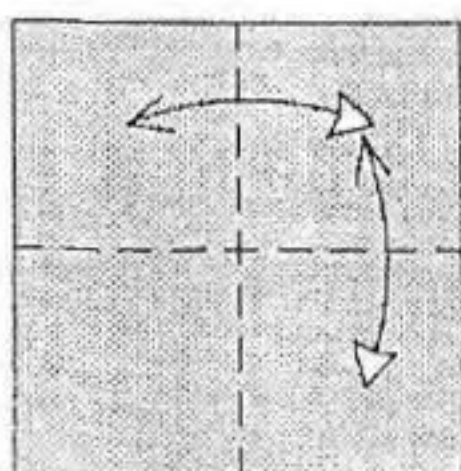
川畑文昭氏からモントロール氏に伝わった模様折りが、その年の四月にニューヨーク・コンベンションでモントロール作品を通じて伝播、二ヶ月程で作品をものにされたようです。この時、背中の斑点は六つでし

た。

来る八月初めのラング氏の初来日の記念に作品掲載のお話を「探偵団」からいただいて、その甲虫に思い当たり、折り図をお願いしてみると、星の数は3倍近くにもなっていて、あせんとさせられました。

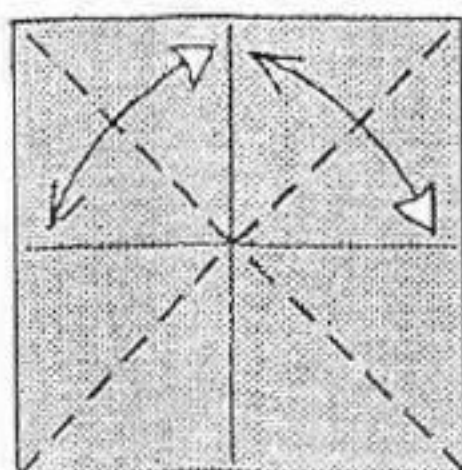
虫なので小さく作りたい所ですが、腕に自信のある方も、最初は大きな紙をお使い下さい。斑点もさることながら、足の折り行程が思いがけぬ展開でなかなかの快感です。

1



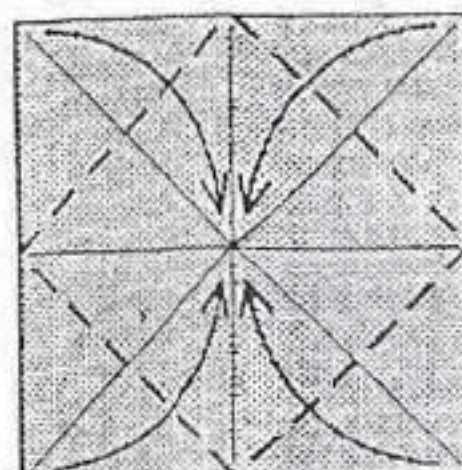
折り線をつける

2



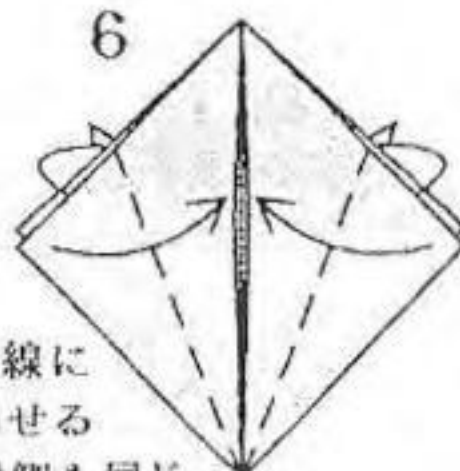
折り線をつける

3

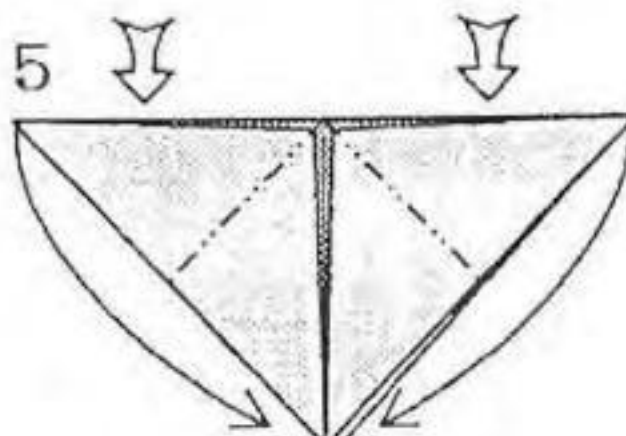


ざぶとん折り

6

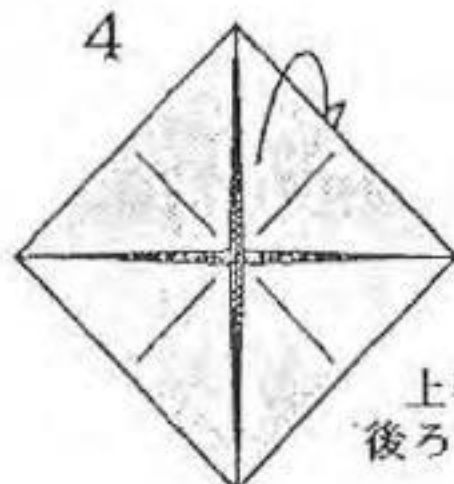


中心線に
合わせる
反対側も同じ



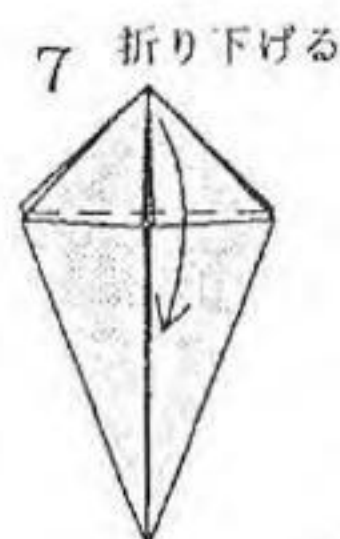
中わり折り

4



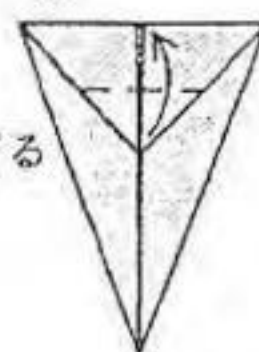
上半分を
後ろへ折る

7

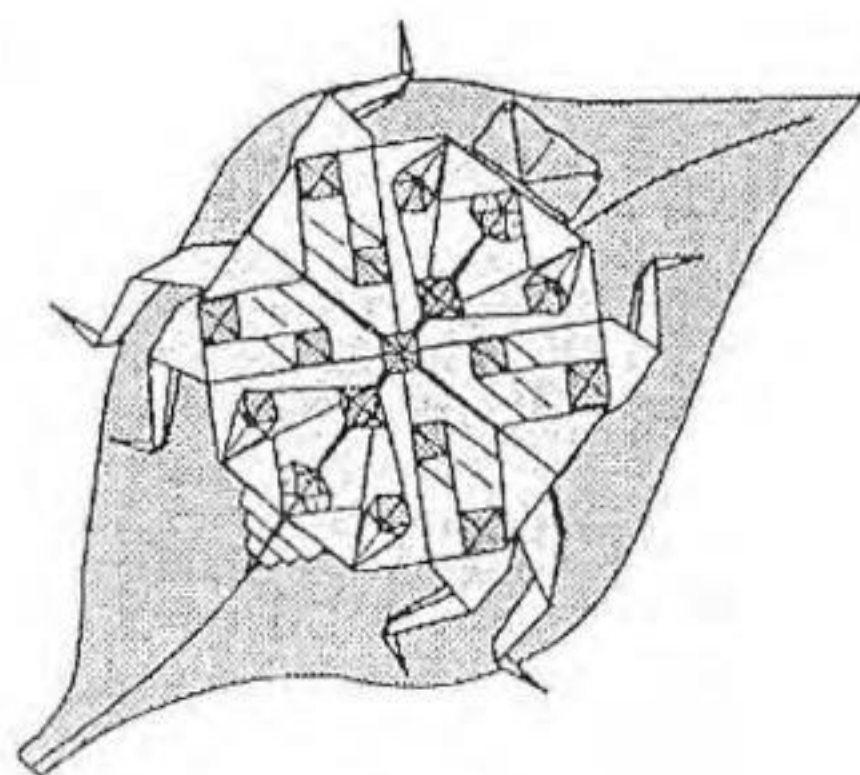
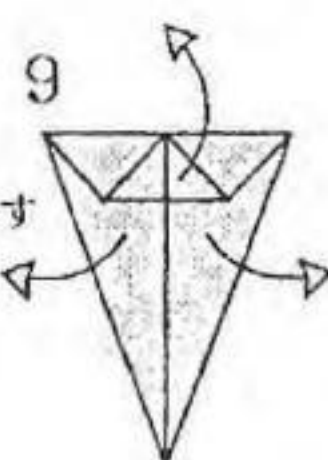


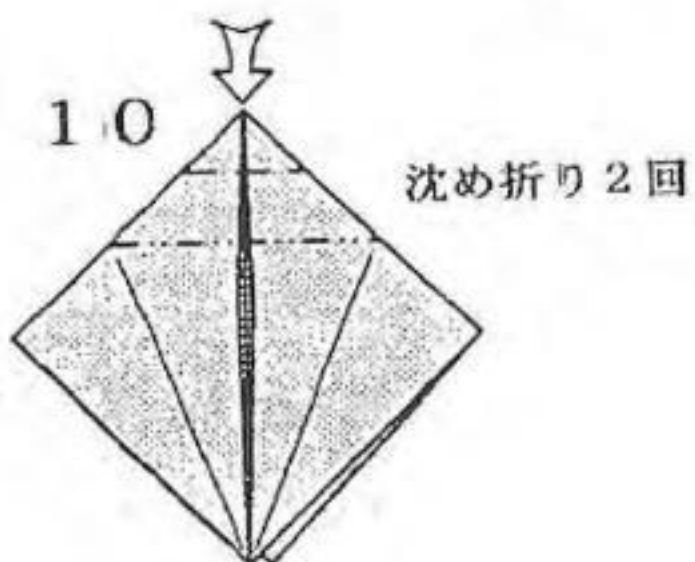
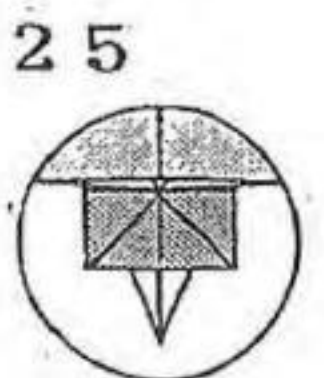
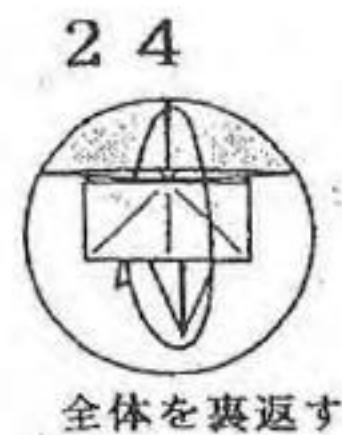
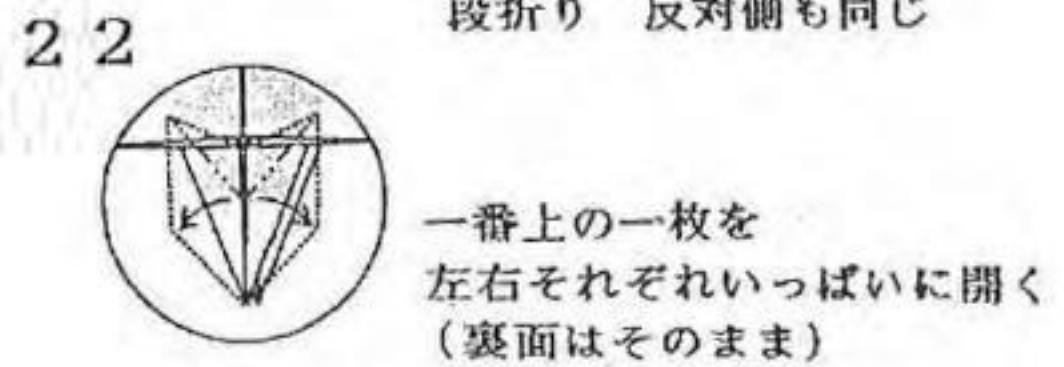
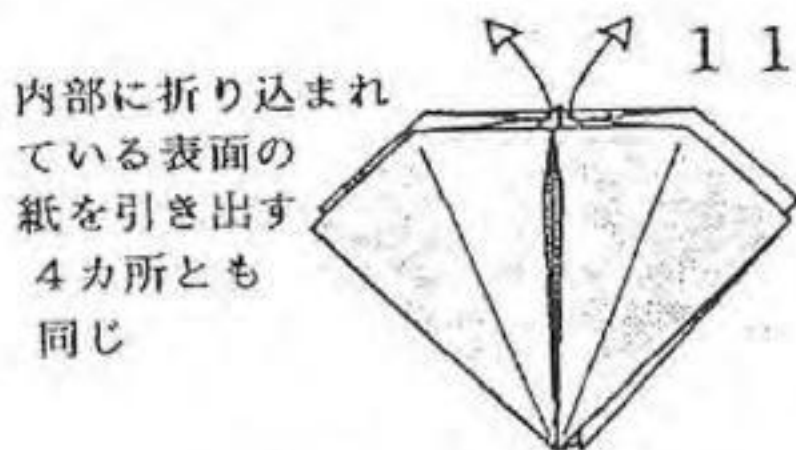
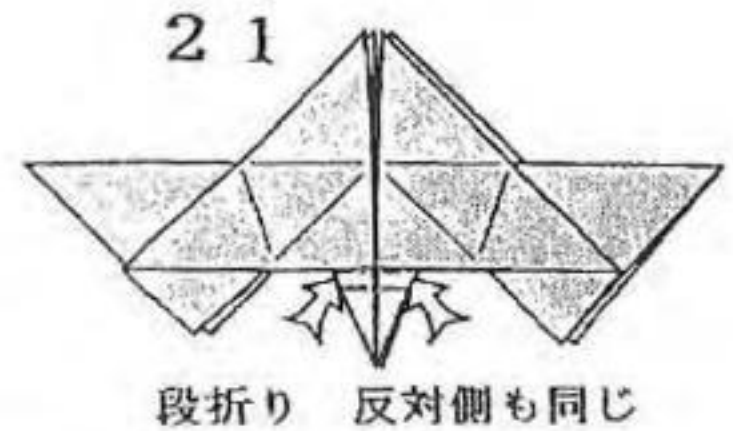
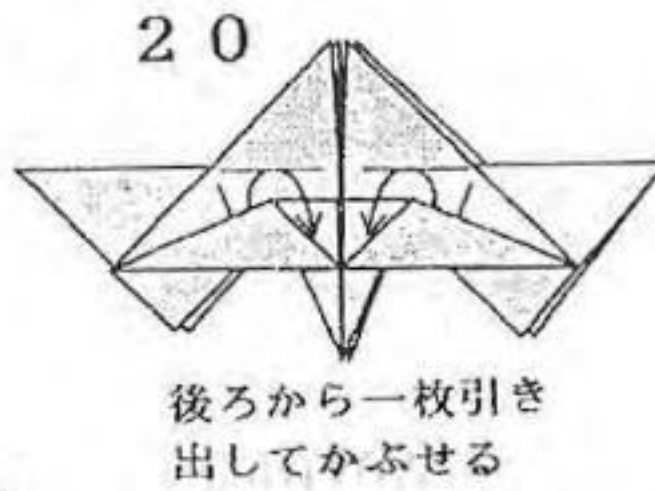
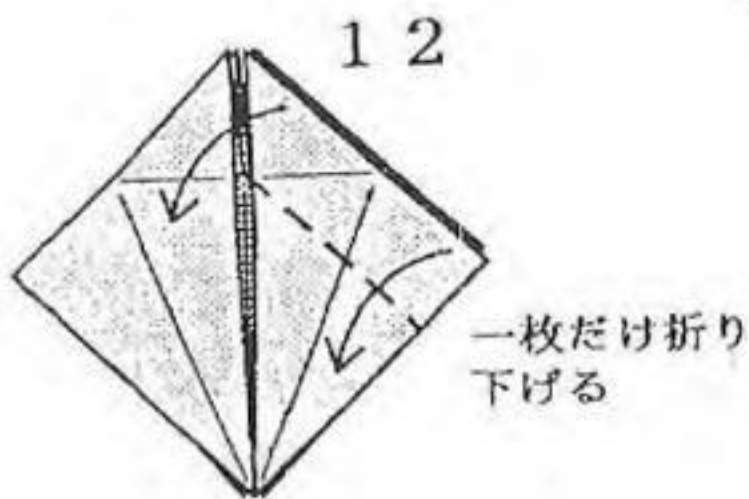
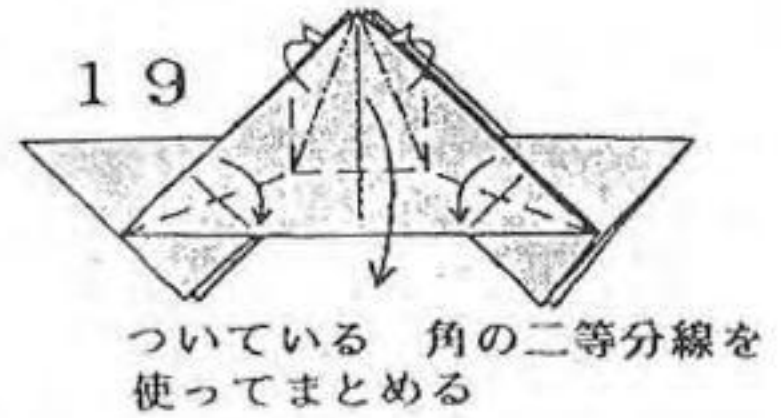
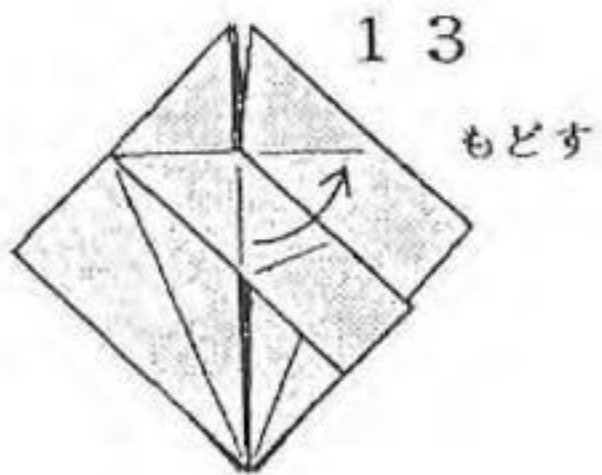
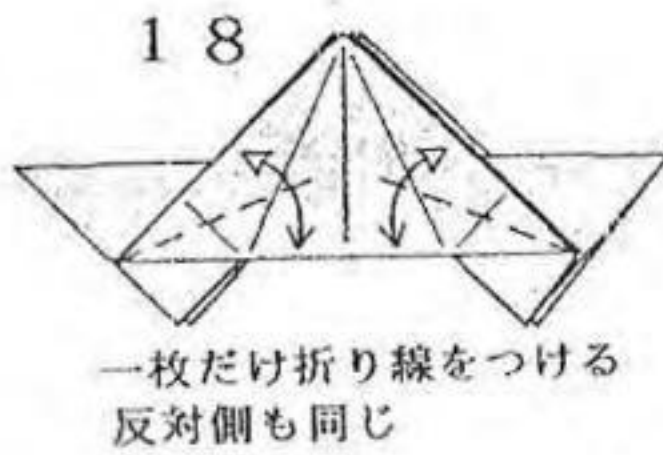
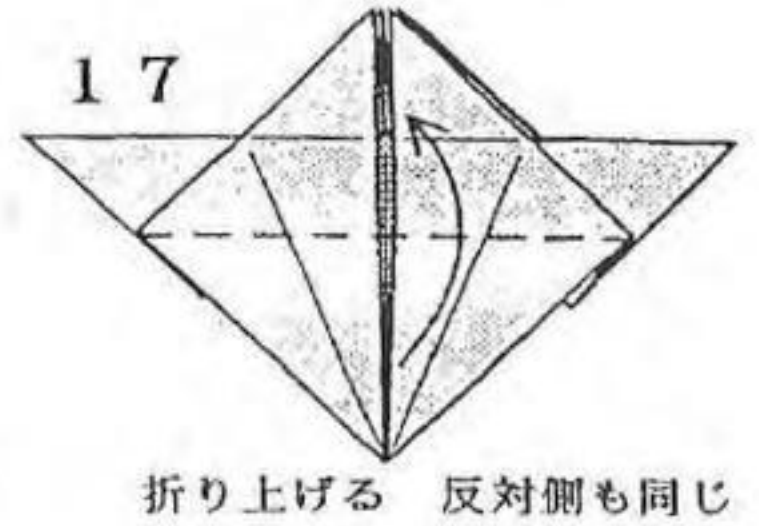
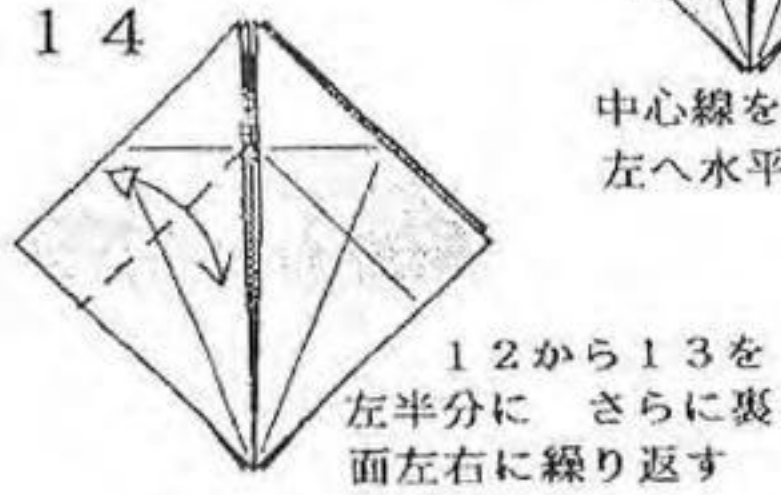
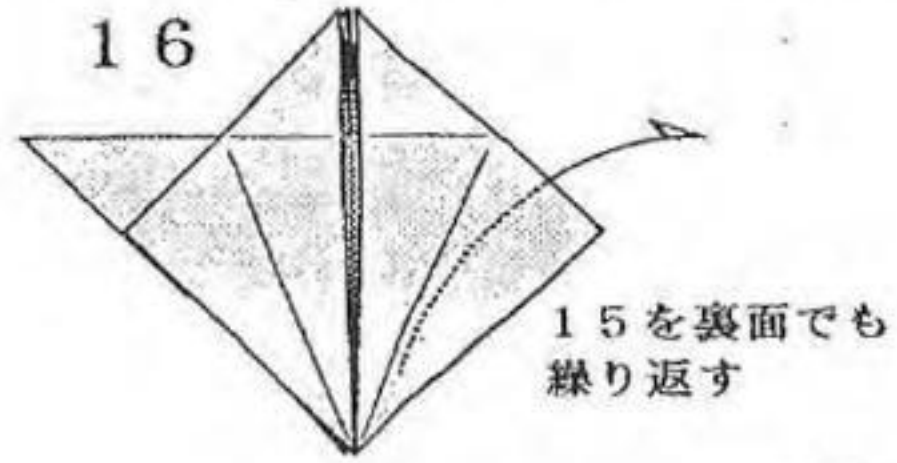
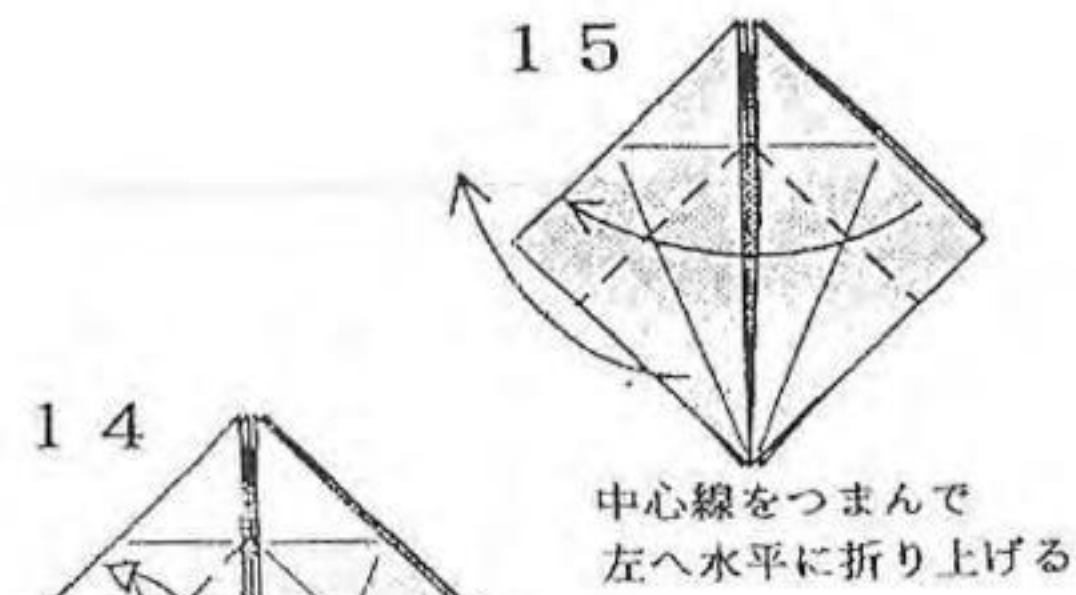
折り上げる

8

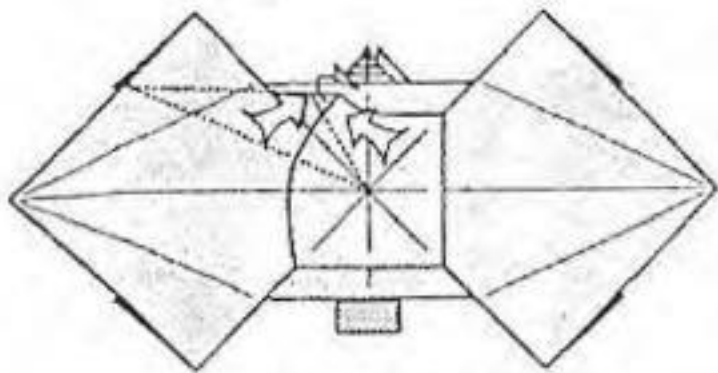


6までもどす



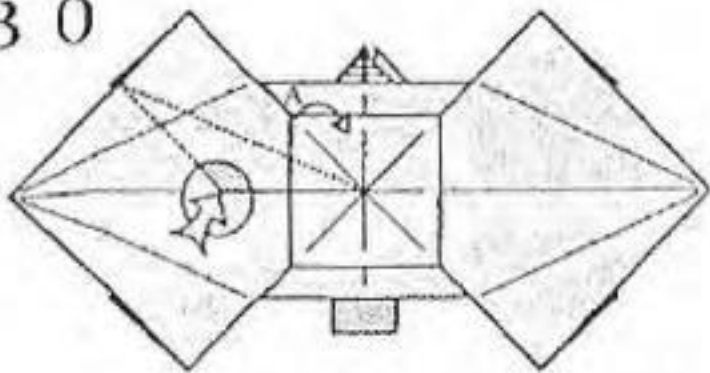


3 1



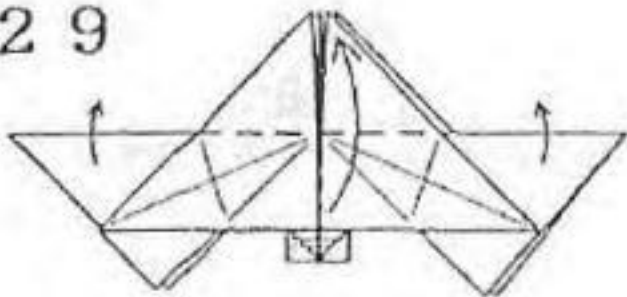
浮いてくる紙を右へ引き
中央の正方形の下へ折り
込んでおさめる

3 0



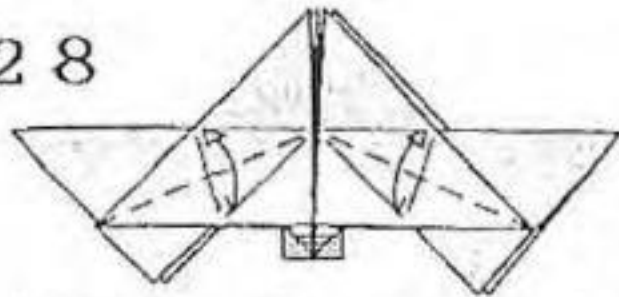
A点の内部から一枚をつまみ
水平にそろうまで引き出す

2 9



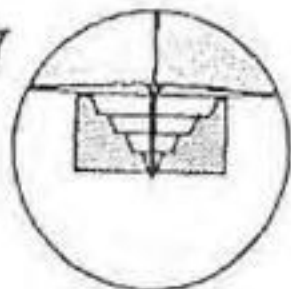
開く

2 8



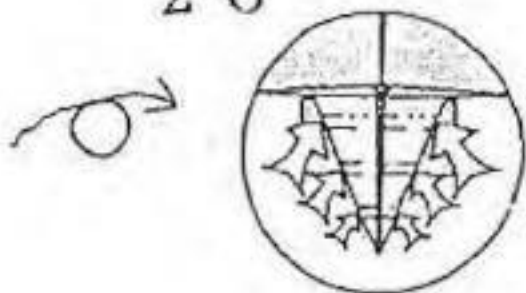
折り線をつける 反対側も同じ
(正方形の中心線ではない 折り
線の起点に注意)

2 7



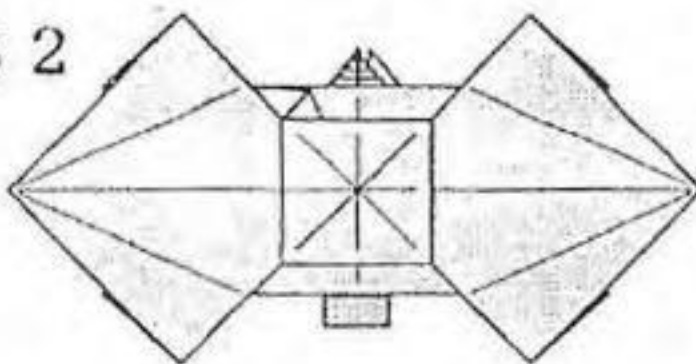
腹部完成

2 6



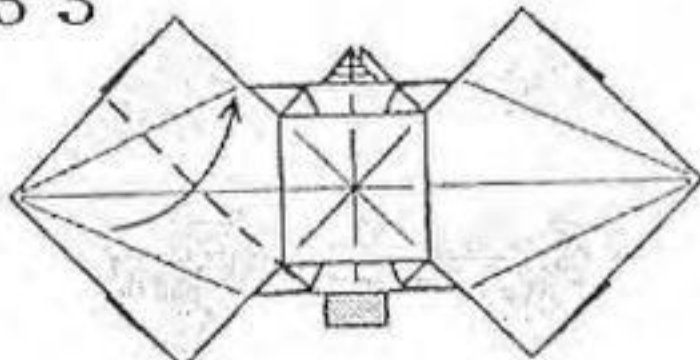
段折り

3 2



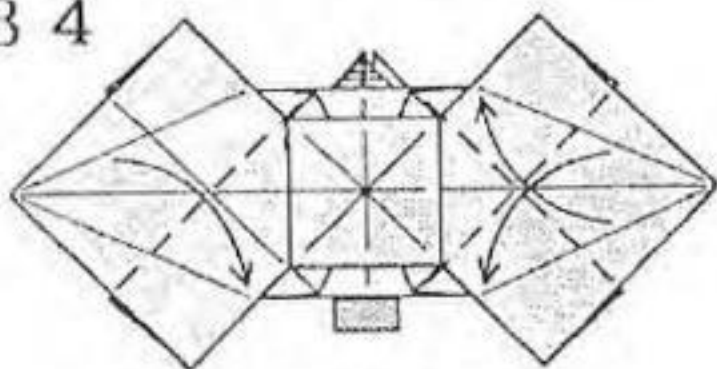
2 9から3 0を
残りの三カ所で
くり返す

3 3



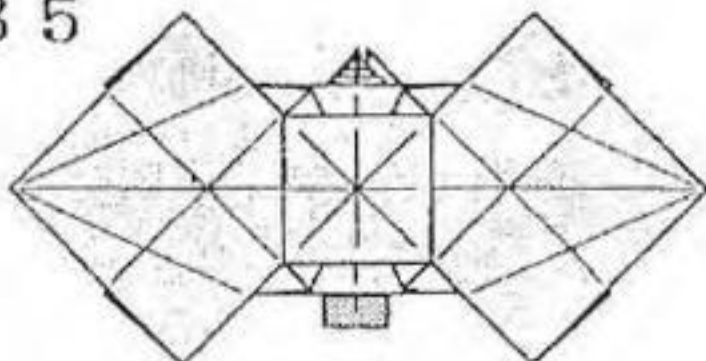
折り線をつける

3 4



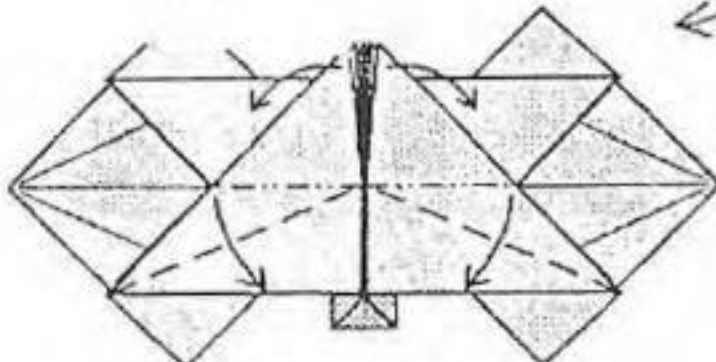
残りの三カ所も同様

3 5



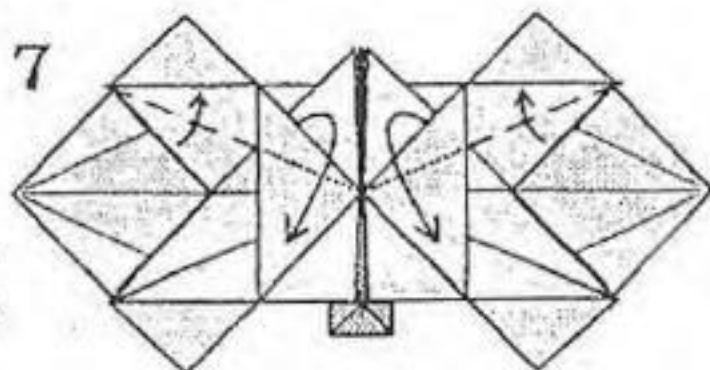
全体をひっくり返す

3 6



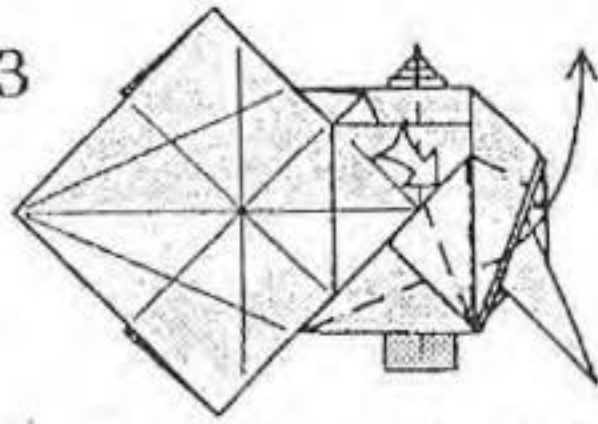
左右の一枚を段折り

3 7



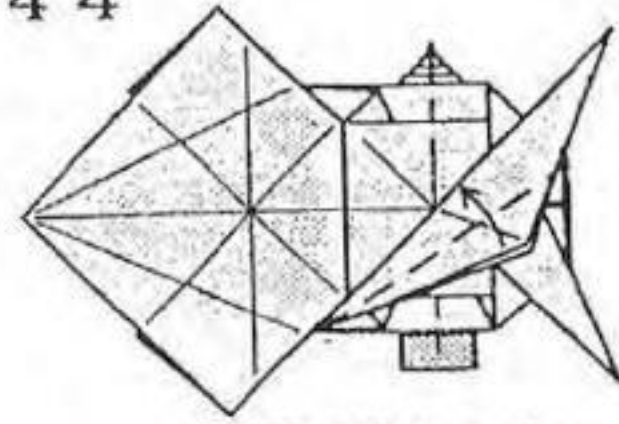
同様に段折りし
3 5の段折りの
上へ重ねる

43



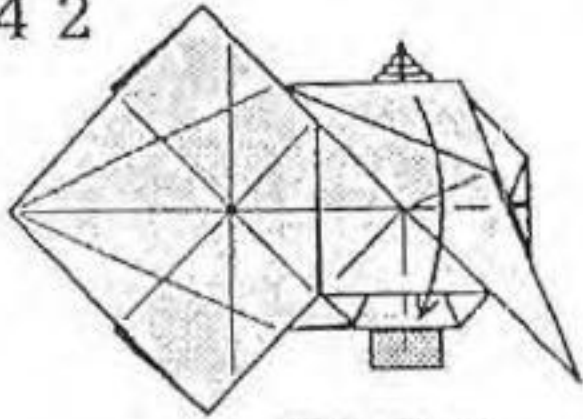
40と同様 今度は右上へ

44



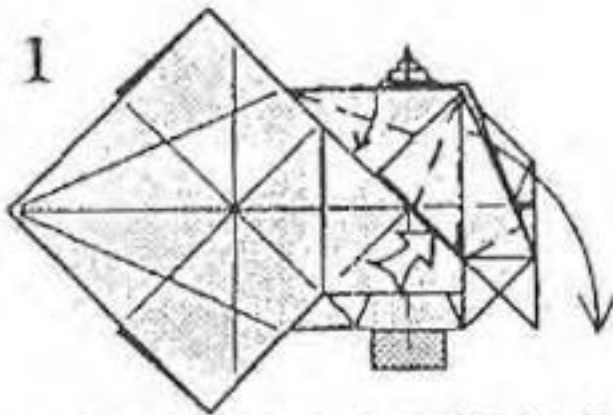
一枚だけ折り上げる

42



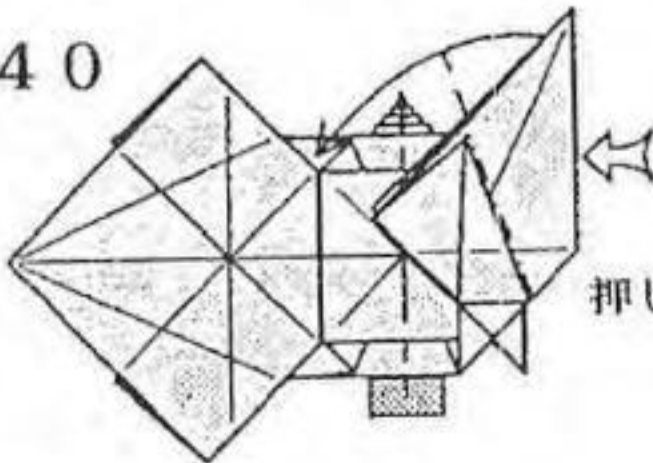
折り下げる

41



表面の角を細くしながら右下へ引き
浮いてくる紙を平らにまとめる

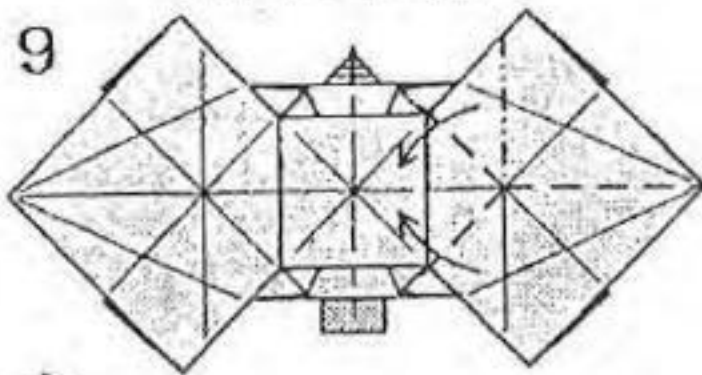
40



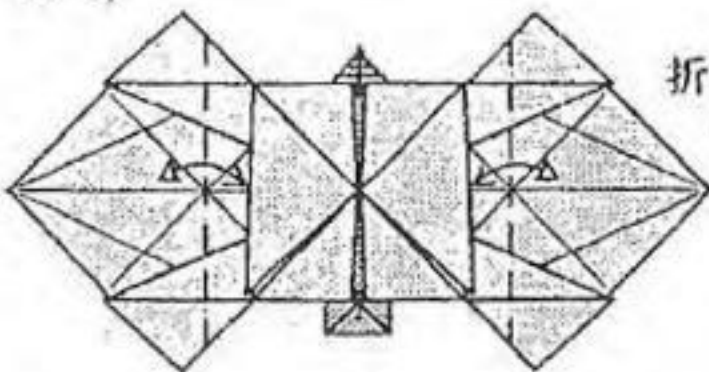
押し込む

全体をつまみ折り

39

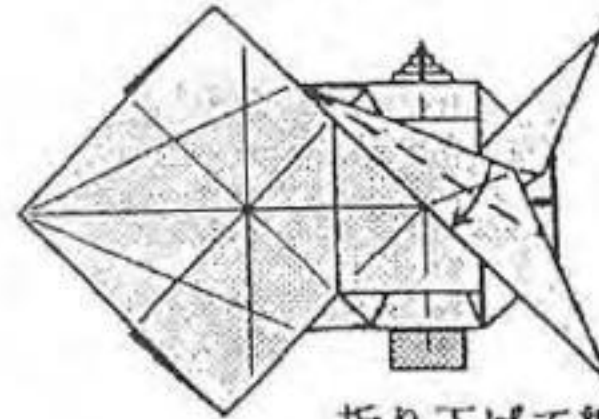


38



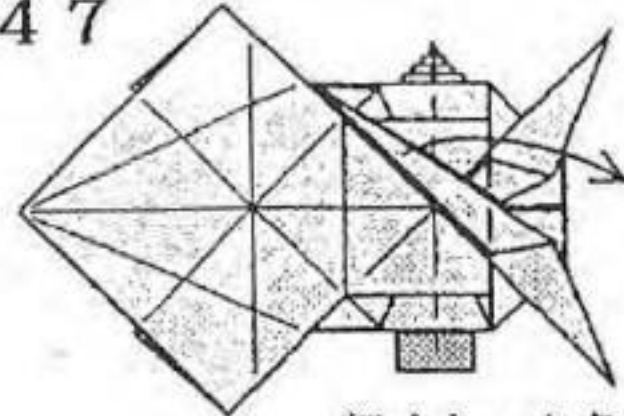
折り線をつけてから
ひっくり返す

46



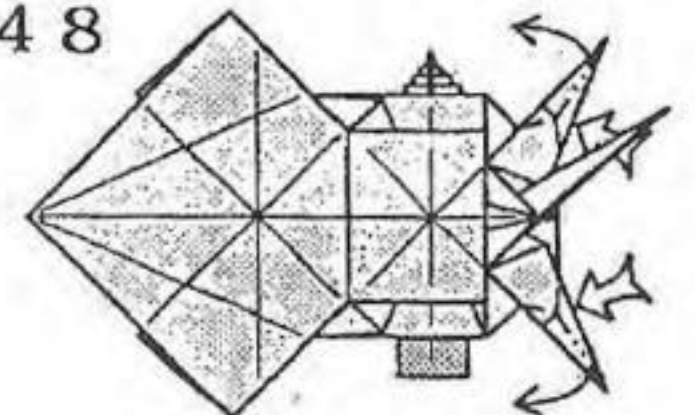
折り下げて細くする

47

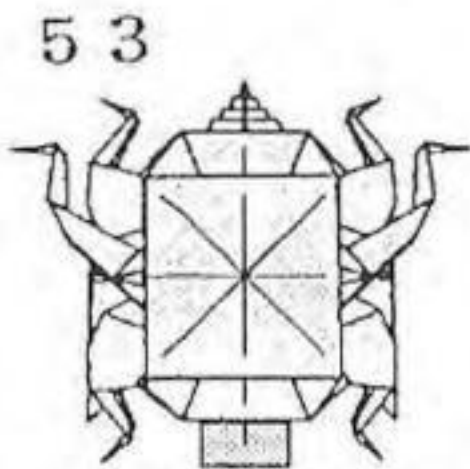


細くなった角を右へ

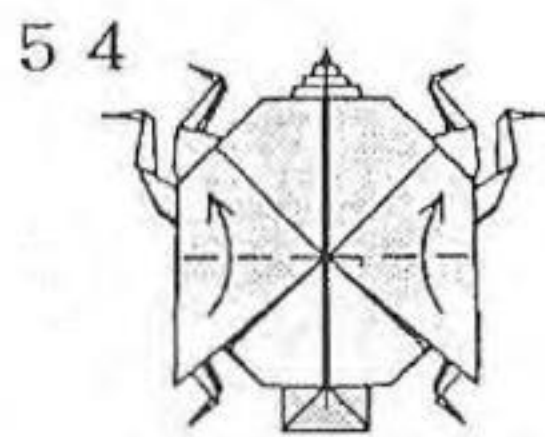
48



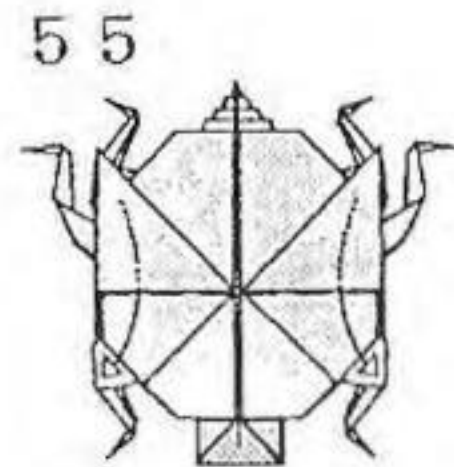
太い角ふたつを
つまみながら中わり折り



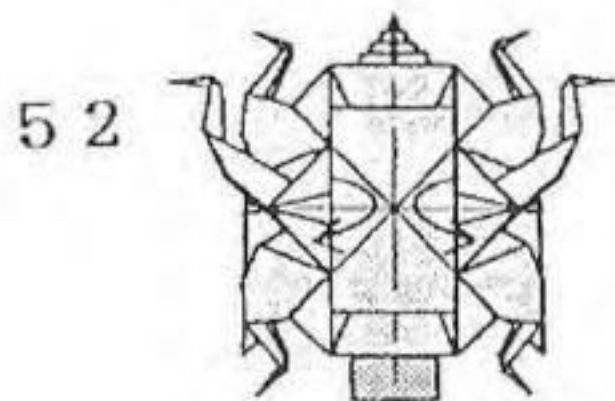
全体をひっくり返す



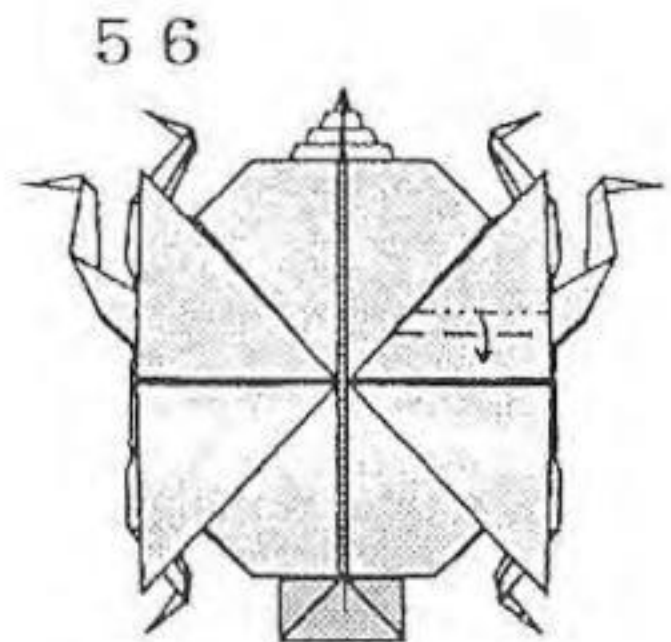
左右の一枚ずつを
折り上げる



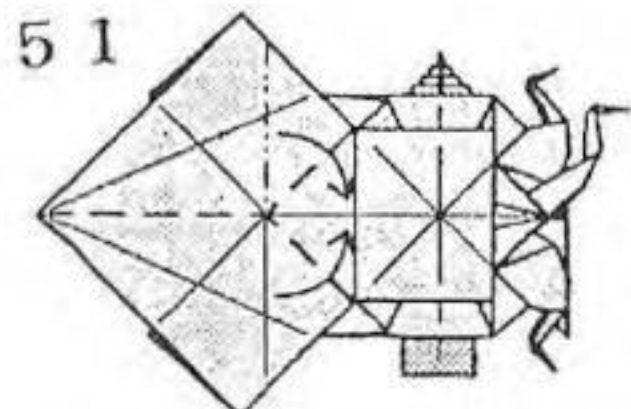
はさまっている角を
引き出す



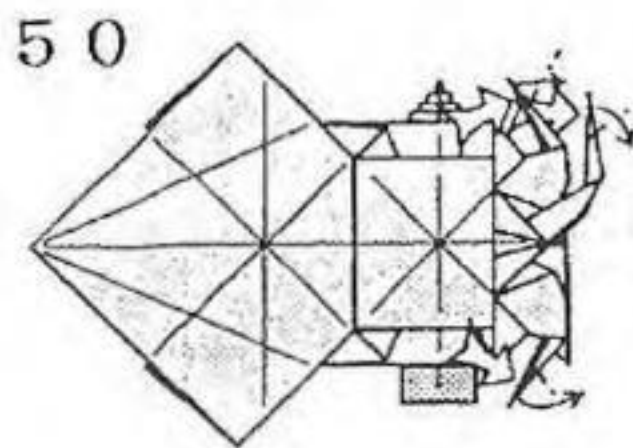
中央の正方形を引き出す



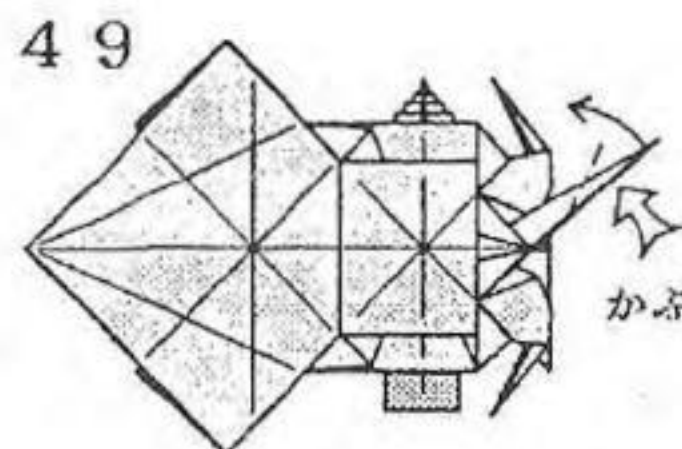
段折り



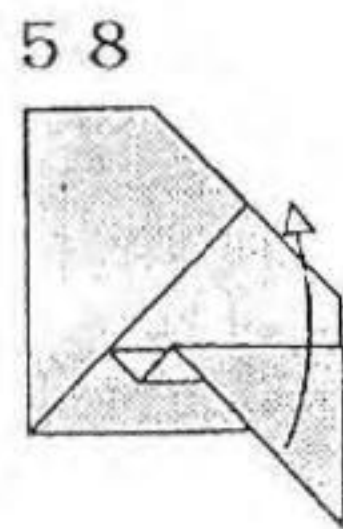
左側も38から49と同様



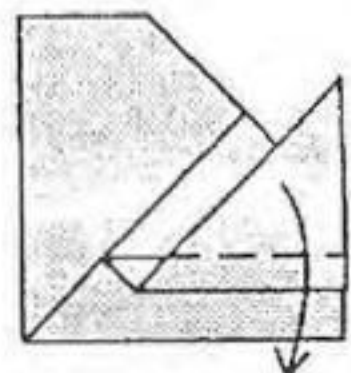
足の先を
それぞれ
中わり折り



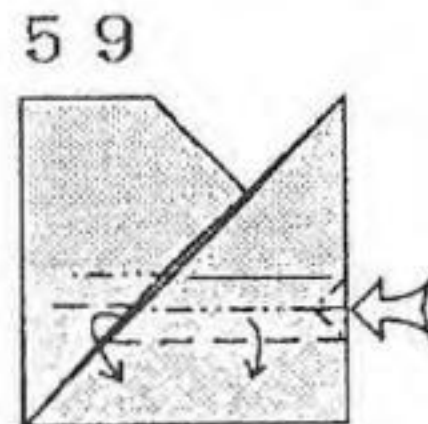
かぶせ折り



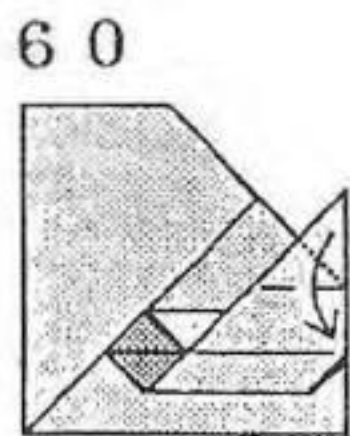
もどす



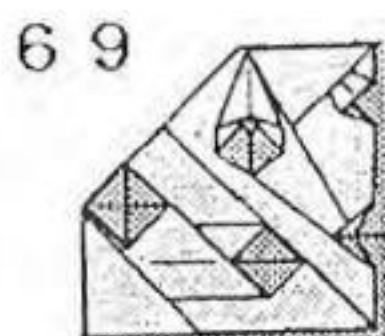
段折りの縁にあわせて
折り下げる



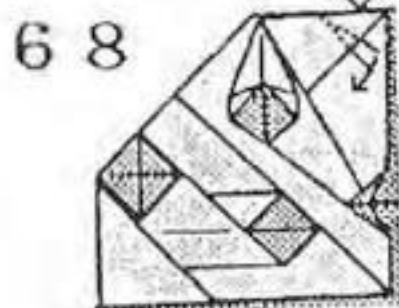
奥をしずめながら
ついている折り線
でつぶす



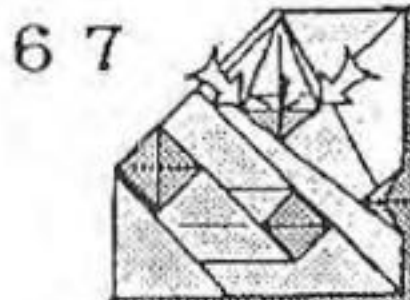
すぐ下の本体の角を
めやすに 折り下げる



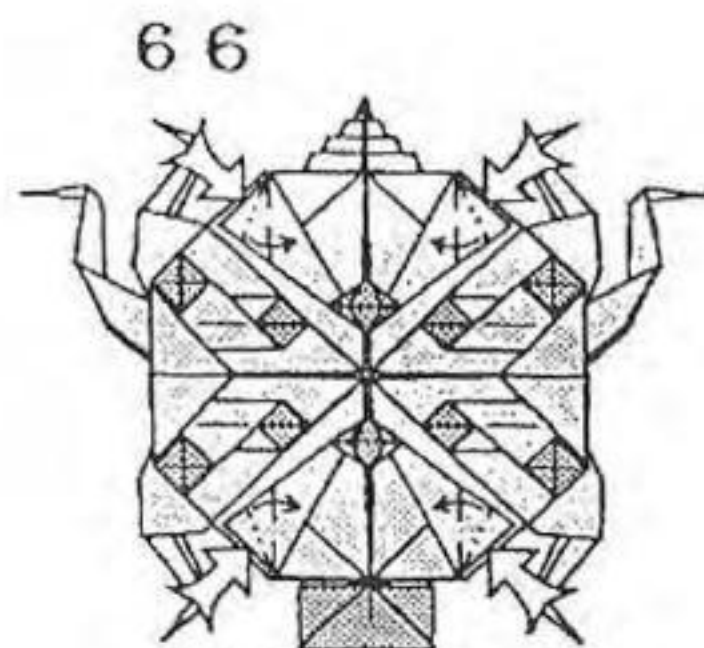
66から77を
ほかの三カ所でも
くり返す



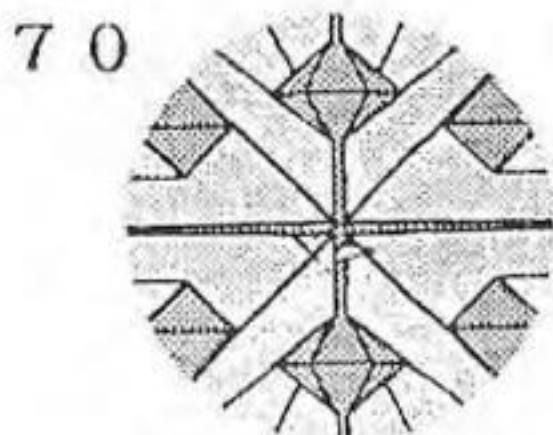
三角形の下で小さく
つぶし折り



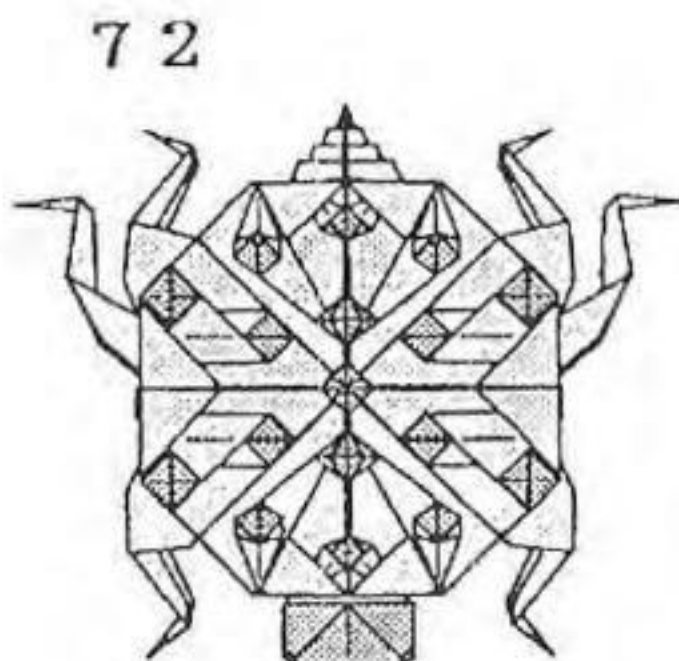
色の部分をひし形に
出しながら
小さく花卉折り



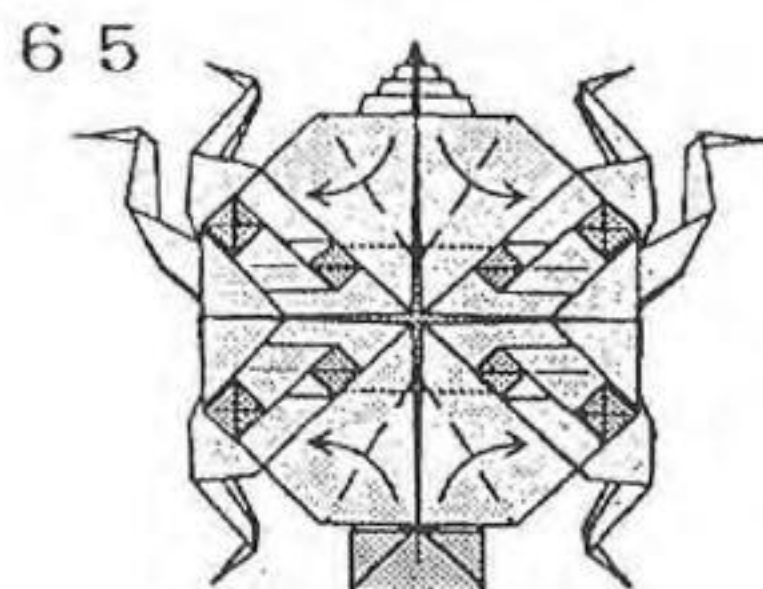
四カ所をつぶし折り



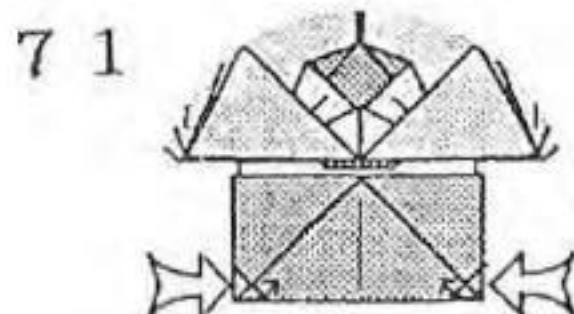
中央の4つ角を小さく
折り込む
ここでは一例のみを図示



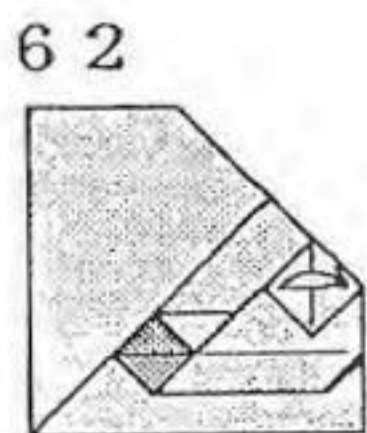
「十七星てんとう虫」
完成



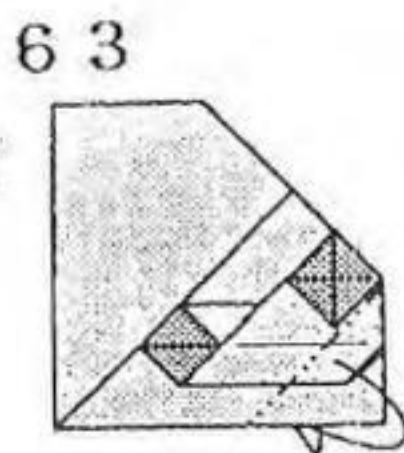
上下二カ所を中心線から開く
左右に三角形ができて色が出る



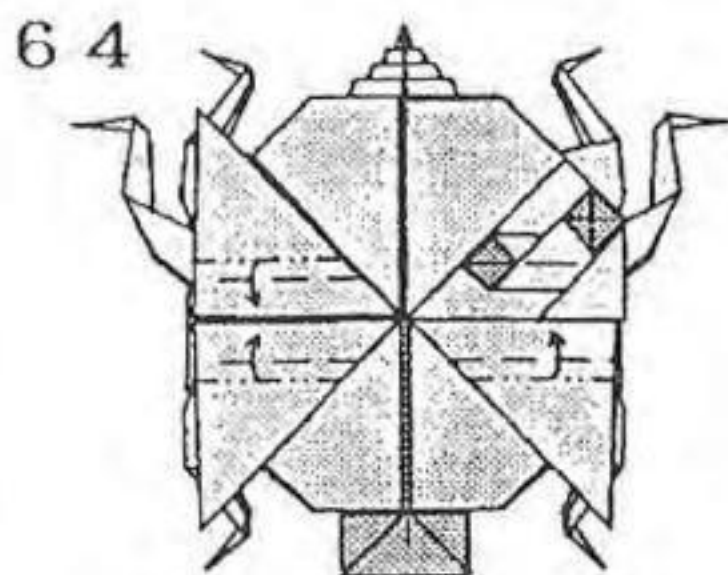
頭の角を
中わり折り



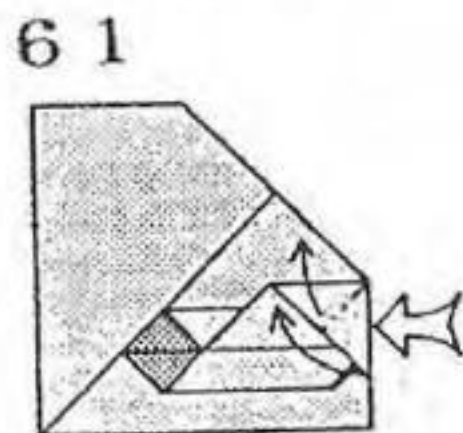
正方形の半分を右へ返し
色を出す



まとめて山折りして
下へ折り込む



55から62をほかの
三カ所でもくり返す



つぶし折り

ロバート・ラング氏 来日記念 おりがみ作品展

今回、日本折紙協会（NOA）の招きで来日、シンポジウムに参加されることになった、ロバート・ラング氏が、ギャラリーおりがみはうすで、個展を開くことになった。8月6日から9月6日の間、開かれる彼の個展は、おりがみはうすにとっても初の海外からのオリガミアンの個展となり、いま周囲から注目され

ている。

ラング氏は滞在中、（2週間程度）時間の許す限りおりがみはうすの方に顔を出して、一人でも多くの折り紙仲間と会って、触れ合いを持ちたいという希望をもっている。彼が直に制作した作品を見るチャンスでもあり、一度は見なけりゃ損といった作品展になりそう。

つまみ折り PART 1

富士にはばたく 銀の鶴

静岡県富士市、市役所西側の交差点（富士市永田町2丁目）に、ステンレス製の大きな一對の折り鶴が輝いています。

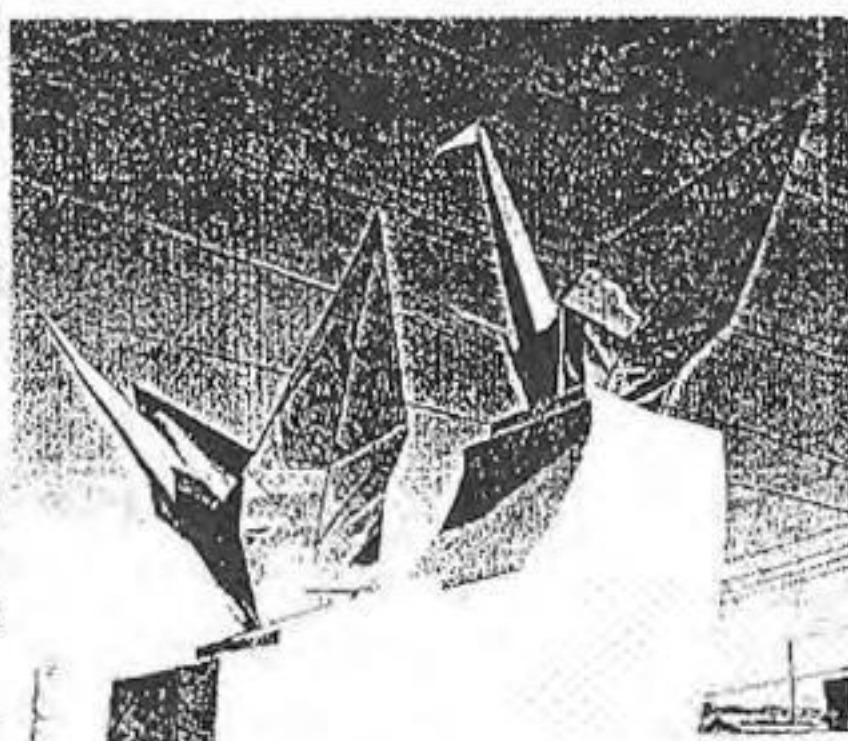
これは「製紙」を代表的産業とする富士市が、街角整備事業の一環としてモニュメントを設置するにあたり、「紙」を象徴するものとして折り鶴を選んだということでした。

この鶴の製作にあられた、探偵団員でもある大房さんにお話をいただきました。

折り鶴 モニュメント製作記

大房盛彦

私は現在、熱海にある工場でステンレスを中心とした加工の仕事に従事しております。私の担当は主とし



ステンレス折り鶴の雄姿

てレーザーカットと板金を折り曲げての文字作りで、「折る」事にはよくよく縁があるようです。

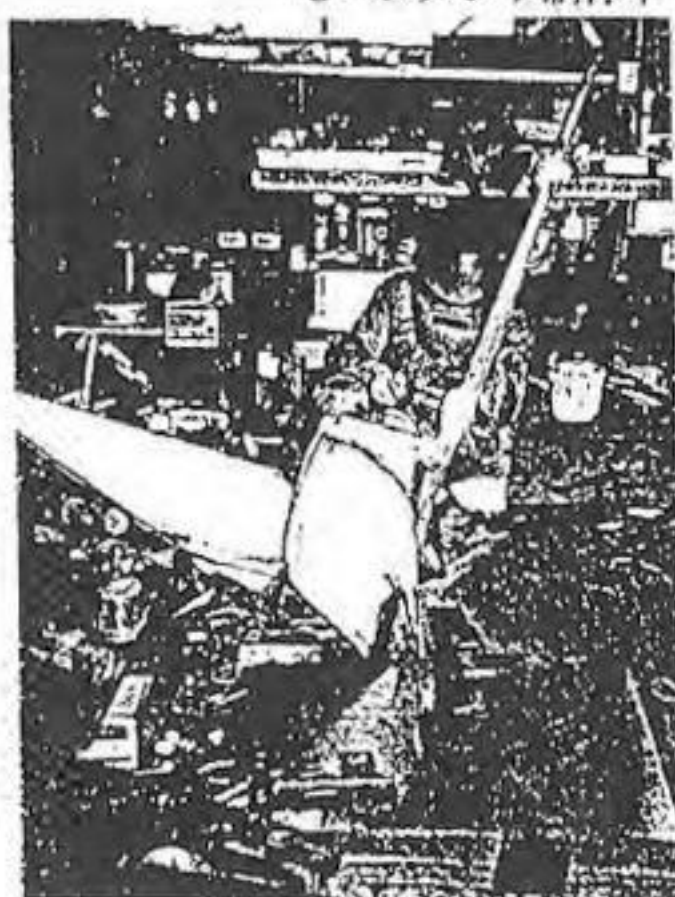
昭和60年に富士市の依頼で、折り鶴のモニュメントを製作しました。記念になる仕事なので工場を挙げて（と言っても総勢5人ですが）製作に当たりました。

2羽の鶴が向き合う像で、どちらも1m以上の大きさです。かなりの強度が必要でしたので、骨組も頑丈に作り、材料も厚い板を使っており

ます。

紙と違って一度折り畳んでから開

モニュメント制作中



くということではできませんので、1枚の板で「折る」わけにはいかず、各パーツごとに折れる部分だけ折り曲げて最後に溶接で一つに組みあげました。いかにも1枚の紙（ステンレス）で折ったように仕上げるのと、背中の丸み、羽の開き具合が苦心したところでした。

比較的よく目立つ所にあり、なかなか豪華ですので、興味のある方はぜひご覧になって下さい。

第20期 日本折紙協会 総会開かれる

NOAの第20期の総会が5月31日の日曜日に、東京、四谷の主婦開館で開かれた。

20周年を迎えるNOA、決算報告とともに、数多くの事業計画が報告された。中でも我々オリガミアンの興味を引くものもいくつかあった。

第9回世界展のことや、高木氏が月刊「おりがみ」で連載していた「古典にみる折り紙」を月刊おりがみ別冊として出版。「おひなさま鑑全集」（仮題）の出版。などなど、NOAも忙しい一年になりそう。

また役員改選の期にあたり、いままで運営委員であった田中陽子さんと、山口真氏が新理事に、井上文雄氏が新運営委員にそれぞれ選任された。

総会終了後には、恒例の親睦会も開かれ、なごやかなうちに無事終了した。

上越科学館おもしろおりがみ展

8月1日から、23日まで、新潟県上越市の新潟県立上越科学館で、上越科学館おもしろおりがみ展が開かれる。昨年の暮れに、おりがみはうすの方に企画制作の依頼があり、何回か打ち合わせをもち、進行していたおりがみ展が、いよいよ実現の運びとなり、開催されることとなった。

作品制作は、探偵団新聞でもお馴染みのメンバー、木村団長以下、岡村昌夫、川畑文昭、高井弘明、西川誠司、吉野一生、目黒俊幸各氏の主力メンバーを中心に、超難解折り紙作品の大好きな羽鳥昌夫氏（モントロール、ラング氏作品担当）、ミニチュア折り紙の高校生、鈴木稔君と、現在の若手おりがみ界を代表する人達の作品がずらり勢ぞろいしたといっても良く、迫力あるおりがみ展が期待されている。

展示される内容も、折紙探偵団の定番である恐竜をはじめに、怪獣、昆虫、海の生き物、飛行機、古典ものでは千羽鶴折り方からの作品。ま

た、探偵団の夫人部隊からはくす玉パレードなど々とパラエティーに



8月1日に折られる予定の
巨大恐竜「ブラキオサウルス」 川畑文昭作

富んだ展覧会。

また、初日の1日には7メートル四方の紙で巨大恐竜を公開制作。2日には選抜小学生20チームによる3.5メートル四方の紙で折る恐竜折り紙コンテストが開かれる予定。

新潟県上越市下門前町446-2
新潟県立上越科学
Phone 0255(44)2122

作品展示に最適な

ステージ

葛飾区亀有、南口商店街のツインビル1F、三和銀行のキャッシュポイントにガラス張りの円形スペースがあり、工芸、芸術活動を行う方々に開放されています。

ここで現在、吉野一生、西川誠司、木村良寿の3人、つまりパピロサウリアによる恐竜おりがみを展示中です。

このうち、全長1mをこすティラノサウルス全身骨格（おなじみの吉野です）は今までで最高の出来です。

特に開場時間といったものはなく、いつでもご覧になれます。

この展示は6月末までですが、今後も年3、4ヶ月は折り紙を飾る意向であるとのこと。皆さんの参加が期待されております。

関心をお持ちの方はぜひご連絡ください。

連絡先

東京都葛飾区亀有3-15-10
Gallery キャトルテラス

03-3690-5640 須藤まで

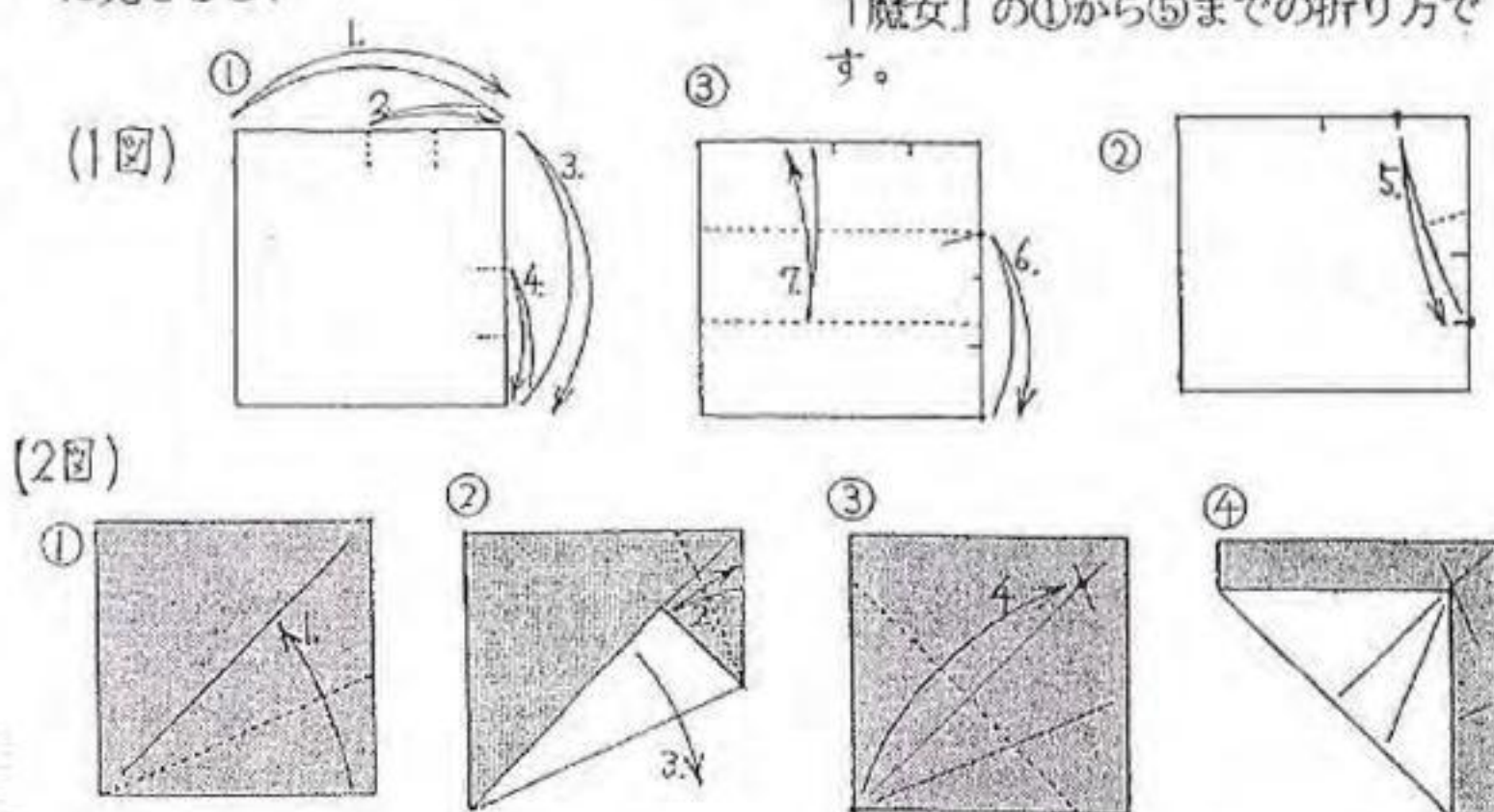
(JR常磐線・地下鉄千代田線
亀有駅下車 徒歩4分)
(実はうちのすぐ近所：木村)

ええもんめーっけ

野間正路

紙を前にして、あれこれと折ったり戻したり裏返したりしている中に、ひょいと新しい発見をしたときは、実に嬉しいものです。

後日これを折り紙のベテラン某氏に見せると、



折り紙ビギナー奮戦記

木村哲夫

第3回完成、しかし……

中割折りがわからない。

断念したくなった時、思い付きで折ってみた。なんと、折図と同じになった。折込む所が、きちんと折込まれている。やっと、中割折りが形になり、次のページに進めた。

2ページ目からは、前頁とはまた図が違う。続きで来ているはずなのに、前頁で苦労した「中割折り」の後の図がない。折線が一本入っているだけ。「何だ、これは。」と思ったが、引っ繰り返したと納得。

順調に、折り進めると思ったのも束の間、また手が止まった。ここで、また中割折りとなる(16図)。下嘴(したくちばし)を折り出すためと思うが、「内側の一枚を中割折り」とある。意味がわからない。確かに、2枚重ねにはなっているが、どう折ればいいのか。よく判らないところは、取りあえず飛ばすことにし

た。折り進もうとしたが、すぐに手が止まった。

折図と違うところが出てきてしまった。19図には、下嘴の元がある。原因は、中割折りを飛ばしたことだろう。あわてて、16図に戻る。内側の一枚を図に合わせて、折ってみた。

19図まで進み直した。形は悪かったが、どうにか形になった。一度折った所が、後の折りに合わせて折込まれるというのは、一見しただけでは判らなかった。

気を取り直して先に進む。24図には、「ひきよせるように折る」とある。この表現は判り難かったが、折線と25図とを見比べてなんとか折れた。後は形を整えるための折りが中心で、図をまねて折り進んだ。

難問「中割折り」の後は、思ったより順調に進め、意外に少ない失敗で完成した。この後、何回も練習を重ね、なんとか形に出来るようになった。

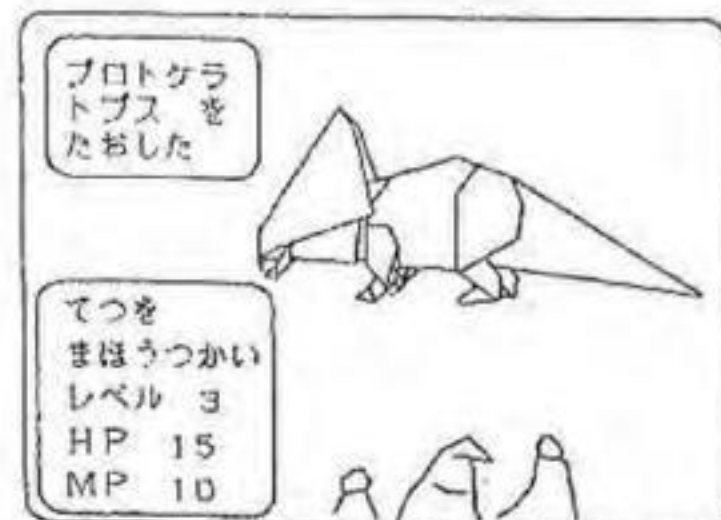
見られるものが出来るまでの期間の長かったこと、それ故に折上がり

の喜びは一入(ひとしお)でした。

ある日、機会があって他人(一般人)に見せた。彼は、一瞥(いちべつ)の後、一言漏らした。

「犬？」

恐竜折紙認知完成までの道程は、まだまだ長く険しい……。



つまみ折り PART 2

ハートのオウさん 来日

折り紙のハートばかりを集めた本を（布施知子・監訳 筑摩書房刊）日本でも出版しているの、オウさんを知っている人や、ファンは多い。そのオウさんが、5月23日に来日した。

25日にそのオウさんを囲んでさやかな歓迎パーティーがギャラリーおりがみはうすで開かれた。（料理は初音みね子さんの手作り）

ちょうど同じ時期に、銀座で個展を開いていた布施さんの世話によるもので、高浜利恵さんをはじめ、いつもの探偵団のメンバー、探偵団夫人部隊（？）の皆さんが集まりオウさんを中心にした、折り紙談義にはなを咲かせていた。

彼の本に紹介されていない作品クルー ハート（新作かどうかきき忘れた）も紹介してくれた。パーティーは、なごやかなうちに終わり、オウさんにとっても楽しい折り紙巡礼の旅になったようであった。

布施知子作品展 IN メルサ

箱、ユニットで、絶対的なファンを持っている布施知子さんの個展が、5月21日から26日まで東京・銀座のニューメルサで開かれた。

今回の個展は、ユニット作品が中心。まず会場の入り口、エスカレーターを降りると目の前に、1メートルもあろうかと思われるほど大きな立方体の作品が飾られてあり、度肝を抜かれた。ほかにも透明のアクリルで作られた20センチほどの立方体のケースの中に容積に合わすように作られた作品は、不思議な雰囲気を出し、見るものを飽きさせない展覧会であった。

制作にあたっては大変な苦労があったようで、いずれ探偵団新聞にでも書いてもらえたらと思います。なお、今回の個展には箱は見あたらなかった。

折紙探偵団

定例会のお知らせ

折紙探偵団では、毎月最終土曜日に、ギャラリーおりがみはうすで定例会を開いています。折り紙を楽しむ仲間達の気どらない楽しい会です。今回は6月27日、次々回は7月25日になっています。時間は、午後6時からで、参加費は実費（1500円程度）です。どなたでも気軽に参加していただけますので、折り紙談義にあなたも花を咲かせて見ませんか。一人でも多くの方の参加をお待ちしております。

新刊書紹介

※だれでもできる
最新くす玉折り紙教室
誠文堂新光社刊 布施知子・著 A-5判 128ページ 定価1500円
ユニットの布施さんがくす玉を作った。布施さんらしいアイデアいっぱいの本。

ぎやらりー おりがみはうす 個展案内

やまぐちまこと
はぎれDEおりがみ
6月25日（木）～7月26日（日）
10時～6時 日・祭5時まで（水曜定休）可愛らしいハギレ、捨てるにはちょっとりもったいないハギレそんなきれで折り紙を折ってみました。どんな物が出てくるかお楽しみ。
たまには素材を変えた折り紙はいかがですか。

おりがみはうすの 夏休み

おりがみはうすは7月27日から8月5日まで夏休みです。この間は、上越科学館、おりがみシンポジウムなどで、不在となりますので宜しくお願いします。

ロバートラング
折り紙作品展
8月6日（木）～9月6日（日）ロバートラング氏来日記念おりがみ作

※だれでもできる

最新はり絵折り紙教室
誠文堂新光社刊 桃谷好英、桃谷澄子・著 A-5判 96ページ 定価1400円 常にご夫婦で活躍されている桃谷ファミリーの最新刊。

※日本の伝承折り紙
西東社刊 山口真・著 A-5判 256ページ 定価1100円 伝承作品を花、虫、動物、おもちゃなど、8つの章に分かれて紹介されている。切り込みのある作品を避けずに、多く紹介しているのが特徴。

※デコレーションBOX
筑摩書房刊 布施知子・著 B-5判 80ページ 定価1230円 すてきな飾りがふたをいろどるプレゼントにぴったりの箱が紹介されている。

※らせんを折ろう
筑摩書房刊 布施知子・著 B-5判 80ページ 定価1230円 直線を折りかさねて表現する「らせん」巻貝、びゅんびゅんバネなど、新しい折り紙が紹介されている。

※一枚折りの箱
筑摩書房刊 布施知子・著 B-5判 80ページ 定価1230円 長方形の紙を使って、一枚で折る箱が紹介されている。

品展が開かれます。詳細は9ページをご覧ください。

橘高美保子

おりがみ作品展
9月10日（木）～10月11日（日）
布施知子さんの作品が大好きな、長岡京市にお住まいの橘高さんのはじめての作品展。布施さんの作品を中心に、橘高さんのオリジナル作品で、飾ります。

編集後記

・野間さんの折り方のほうがいいですなあ（どくどる えぬ）
・折紙探偵団も”歩一歩”と前進しているなと思う近頃です（Y）
・家族総出の折紙探偵団新聞、やりがいはあるのですが、最近少々疲れ気味（MK）

発行・折紙探偵団

112 東京都文京区白山5-36-7
ギャラリーおりがみはうす内
phone (03) 5684-6040
発行人・木村良寿
編集人・岡村昌夫